

第5節 インド経済

2025-26年度（以下本節において「2025年度」と記載。）のインド経済は、世界経済の不確実性が高まる中であっても、内需が成長を牽引し高い成長率を維持した。加えて、政府による物品・サービス税（GST）の合理化¹²⁰に伴い、幅広い品目で税率が引き下げられたことが、さらに内需の拡大を後押しした。

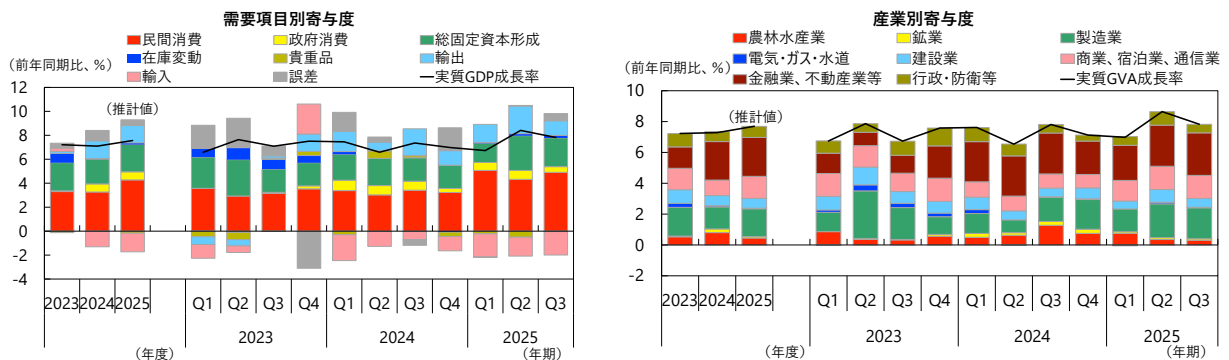
1. GDP

インドの実質GDP成長率は、2025年度第2四半期に前年同期比+8.4%となり、2026年2月に公表された2022-23年基準の新たなGDP系列において、2023年以降で最も高い伸びを記録するとともに、第3四半期においても同+7.8%と高い成長を維持している。インド統計・計画実施省は2025年度の実質GDP成長率を同+7.6%と推計しており、前年度の同+7.1%から加速する見通しである（第2-1-5-1図）。

第1-3四半期の成長は、GDPの約55%を占める民間消費の拡大が主に牽引した。良好な天候による農業生産の増加が農村部の消費を押し上げたほか、2025年9月に実施されたGSTの合理化やインフレの低下により実質購買力が改善し、家計支出の拡大につながった。

産業別では、製造業が前年度から加速した。製造業は第3四半期において、前年同月比で5四半期連続となる2桁成長を記録している。GDPへの寄与が大きいサービス業も、旅行・観光需要の拡大を受けて前年から加速した。

第2-1-5-1図 インドの実質GDP成長率（需要項目別及び産業別寄与度）



備考：2025年度の数值はインド統計・計画実施省発表の推計値。各年度のQ1は4月～6月、Q2は7月～9月、Q3は10月～12月、Q4は1月～3月。

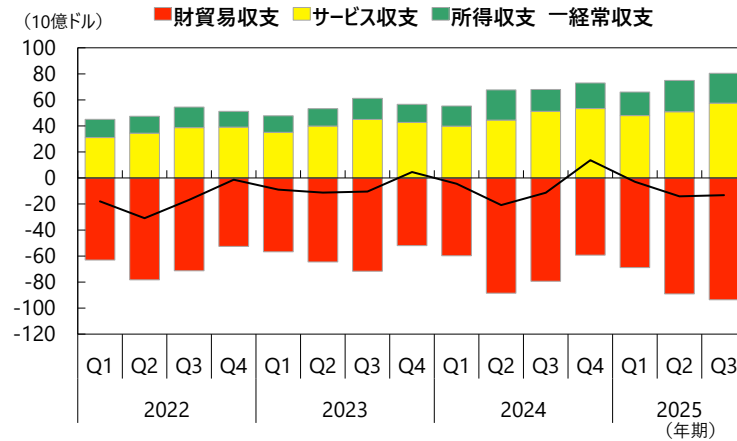
資料：インド統計・計画実施省、CEIC database から作成。

2. 国際収支

インドの経常収支は、サービス収支の黒字が拡大しているものの、大幅な財貿易収支の赤字により、赤字傾向が続いている（第2-1-5-2図）。2024年第4四半期には、サービス収支の黒字拡大等により一時的に黒字化したものの、その後は財貿易収支の赤字拡大により再び赤字に転じている。

¹²⁰ インド財務省、*Recommendations of the 56th Meeting of the GST Council held at New Delhi, today, 2025/09/03*, https://gstcouncil.gov.in/sites/default/files/2025-09/press_release_press_information_bureau.pdf (Accessed 13 May 2026).

第2-1-5-2 図 インドの経常収支推移



備考：各年度のQ1は4月～6月、Q2は7月～9月、Q3は10月～12月、Q4は1月～3月。所得収支は第一次及び第二次所得収支を足し合わせたもの。

資料：CEIC database から作成。

3. 貿易動向

インドの貿易収支は、内需拡大を背景に慢性的に赤字傾向にあるが、2025年は輸出が横ばいで推移する一方、国際的な金価格の上昇等により輸入額が増加したことから、貿易収支の赤字幅は前年から拡大した（第2-1-5-3図）。10月には単月で過去最大の貿易赤字を記録している。

(1) 輸入

輸入については、インド祝祭シーズンにあたる10月にかけて金の輸入額が大幅に増加したことが全体を押し上げた¹²¹（第2-1-5-4図）。また、最大の輸入品目である原油は、2022年以降ロシアからの輸入シェアが拡大したが、2025年末以降は低下傾向にある（第2-1-5-5図）。主要輸入相手国では中国が引き続き最大であり、インド商工省によれば、2025年4月から2026年1月までの中国からの累計輸入額では、特に電子部品や通信機器が前年同期比で大きく加速している（第2-1-5-6図）¹²²。

(2) 輸出

輸出については、通信機器、医薬品、電気機械及び設備が前年比で2桁台の成長を記録したが、主要輸出品目である石油製品が減速したことから全体としては横ばいで推移した（第2-1-5-4図）。主要輸出相手国では、一時最大で50%の追加関税が課せられたにもかかわらず、米国が年間を通して最大の輸出国となった（第2-1-5-6図）。インド商工省によれば、2025年4月から2026年1月までの米国への累計輸出額は、追加関税により米国向けの主要輸出品目であった宝飾品や水産物の輸出が減少する一方、通信機器や半導体等の輸出が伸びたことで、前年同期比で加速した¹²²。

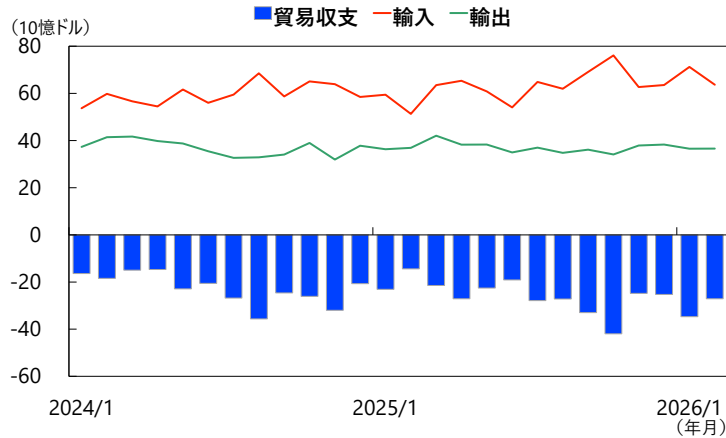
¹²¹ インドでは金は縁起物とされ、儀式や行事の際に装飾品として用いられている。

¹²² インド商工省, *System on Monthly Foreign Trade Statistics of India*, https://tradestat.commerce.gov.in/ftspcc/import_country_wise_all_commodities (Accessed 2 April 2026).

(3) サービス収支

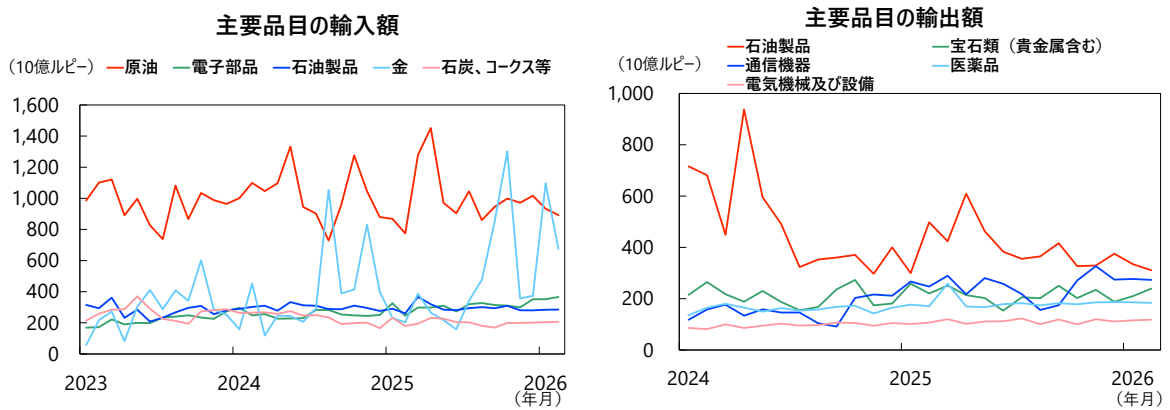
インドのサービス収支は、ソフトウェア、ビジネスサービス又はグローバル・ケイパビリティ・センター（GCC）といった ICT 及び専門業務サービス輸出に支えられ、黒字が続いている（第 2-1-5-7 図、第 2-1-5-8 図）。2025 年第 1～3 四半期のサービス輸出は前年同期比で加速し、同期間のサービス収支黒字額も拡大している。

第 2-1-5-3 図 インドの貿易収支



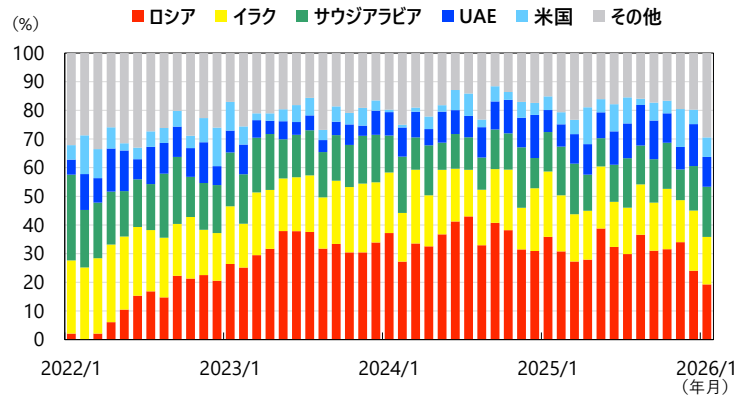
備考：数値は速報値。
資料：インド商工省、CEIC database から作成。

第 2-1-5-4 図 インドの主要品目別輸入額・輸出額推移



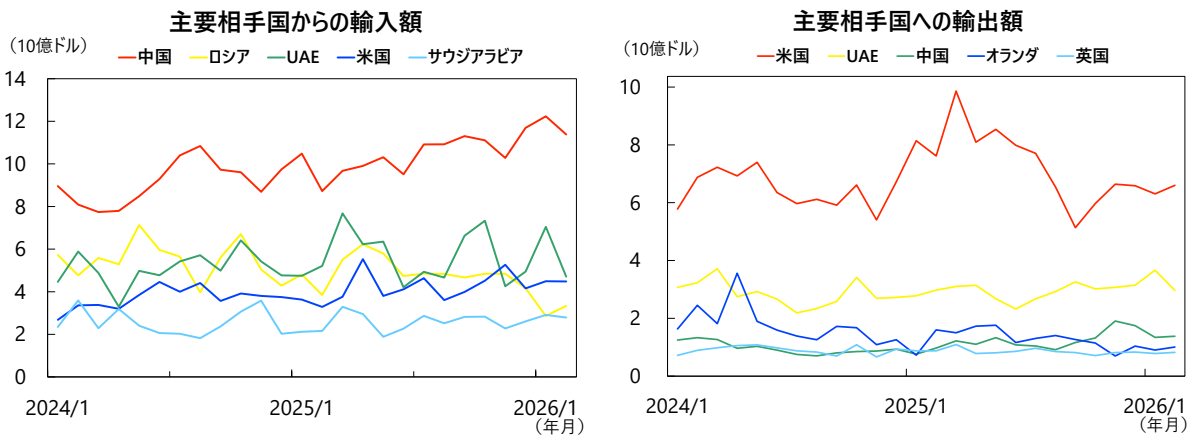
資料：インド商工省、CEIC database から作成。

第2-1-5-5 図 インドの原油輸入に占める各国シェア推移



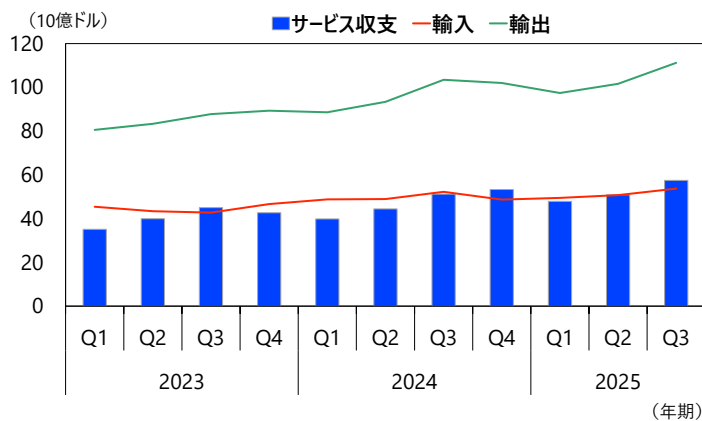
備考：HSコード2709。米ドルの輸入額ベース。
資料：インド商工省から作成。

第2-1-5-6 図 インドの主要相手国別の輸入額・輸出額



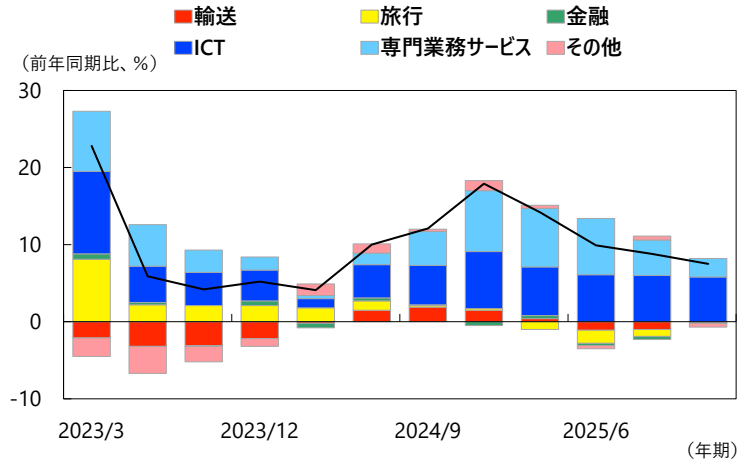
備考：2026年2月時点での輸入額・輸出額別の金額上位5か国を表示。
資料：インド商工省、CEIC database から作成。

第2-1-5-7 図 インドのサービス収支



備考：国際収支ベース。各年度のQ1は4月～6月、Q2は7月～9月、Q3は10月～12月、Q4は1月～3月。
資料：インド準備銀行、CEIC database から作成。

第2-1-5-8 図 インドのサービス輸出の項目別推移



備考：データは四半期。本節では国際収支統計での「その他業務サービス」を「専門業務サービス」と呼称している。この中には、研究開発サービス、専門・経営コンサルティングサービス、技術・貿易関連・その他業務サービスが含まれる。

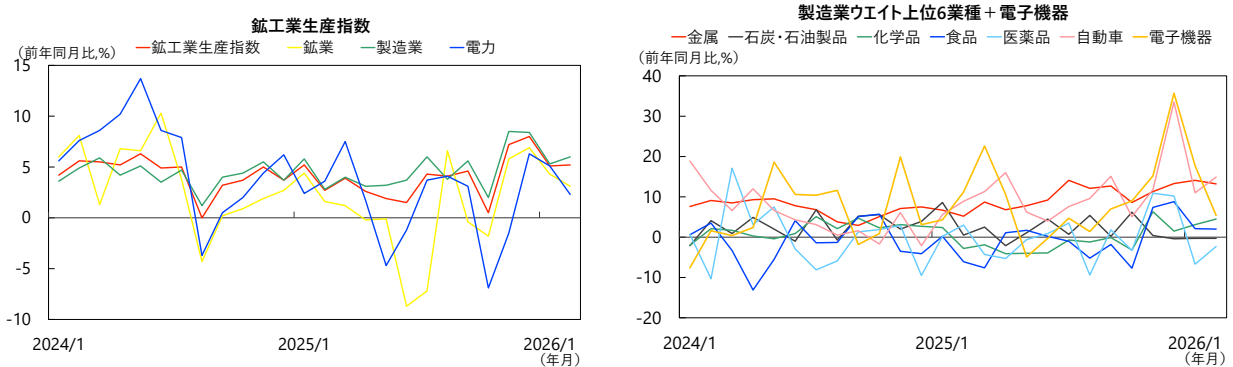
資料：CEIC database から作成。

4. 生産・消費動向

インドの 2025 年の鉱工業生産は、好調な内需やインフラ投資の拡大、製造業の着実な成長を背景に、年間を通じてプラス成長を維持した（第2-1-5-9 図）。特に、11 月には祝祭シーズン後の在庫補充の影響によりおよそ 2 年ぶりとなる高い伸びを記録した¹²³。製造業が成長の牽引役であり、業種別では自動車、電子機器、金属などが好調に推移した。

消費動向については、インドの消費動向を確認する上で代表的な指標である二輪車と乗用車の国内販売台数を見る（第2-1-5-10 図）。二輪車、乗用車ともに、2025 年中頃までは成長率が一時的にマイナスとなるなど弱い動きが見られたものの、その後は GST 合理化による税率引下げなどを背景に、第3 四半期（10-12 月）にはそれぞれ過去最高の販売台数を記録した。

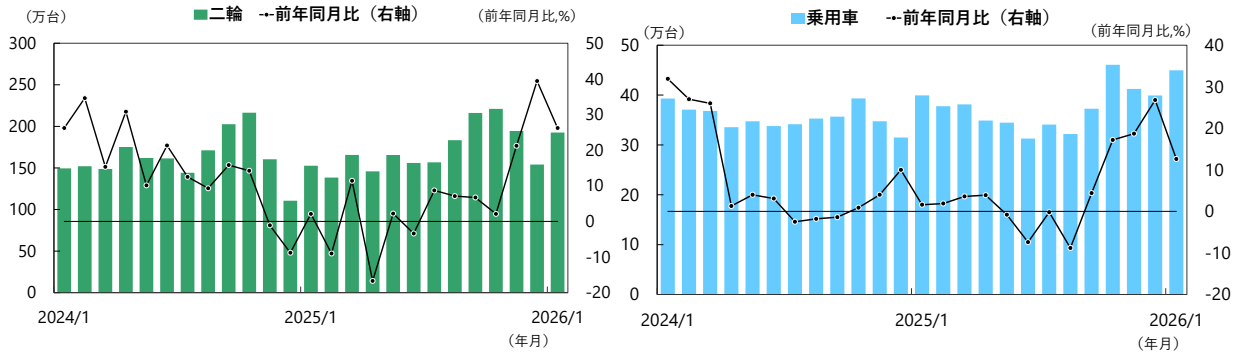
第2-1-5-9 図 インドの鉱工業生産指数



資料：CEIC database から作成。

¹²³ 2025 年は 10 月にインドの主要な祝祭であるディワリが実施されている。

第2-1-5-10 図 インドの二輪と乗用車の国内販売台数



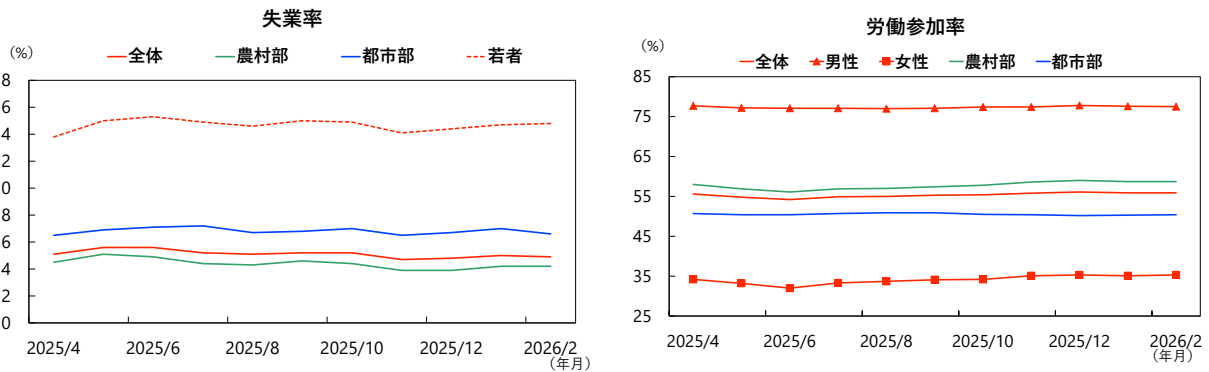
資料：インド自動車工業会（SIAM）、CEIC database から作成。

5. 雇用動向

インドの 2025 年の失業率は、主に農村部における雇用環境の改善を背景に全体としては改善した（第 2-1-5-11 図）。一方、都市部では若年層を中心とした雇用環境の厳しさが下押し要因となり、失業率は悪化傾向にある。若年層全体の失業率は農村部、都市部ともに悪化傾向にあり、2025 年 4 月から翌年 2 月にかけておよそ 1%上昇した。

労働参加率は、農村部の女性の労働参加拡大により全体として改善した。男性の労働参加率は都市部、農村部ともにおおむね横ばいで推移したが、女性の労働参加率は低い水準にとどまっている。

第 2-1-5-11 図 インドの失業率と労働参加率の推移



備考：それぞれ 15 歳以上の Current Weekly Status に基づくシェア。

資料：CEIC database から作成。

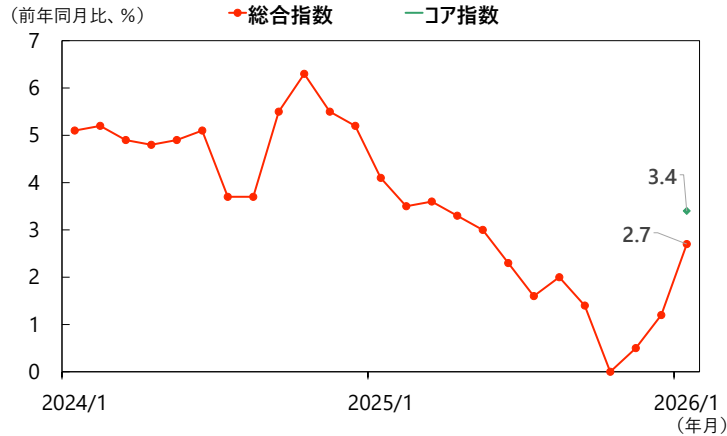
6. 物価・金融政策動向

消費者物価指数は、2025 年 10 月に算出開始以来最低の水準を記録した（第 2-1-5-12 図）。これは、農業生産の増加等により、野菜、穀物や香辛料などの食料価格が下落したことが主因となっている。加えて、9 月に実施された GST の合理化も一部品目の価格押し下げに寄与した。その後、2026 年 1 月には、世界経済の不確実性の高まりを背景に、金や銀の価格が上昇したことが押し上げ要因となり、総合指数は前年同月比+2.7%と上昇した。

金融政策については、インド準備銀行は景気下支えの観点から 2025 年 2 月におよそ 5 年ぶりとなる利下げを実施し、4 月、6 月にも段階的な利下げを実施した（第 2-1-5-13 図）。8 月及び 10 月の金融政策委員会（MPC）では、好調なマクロ経済状況から更なる金融緩和

に含みを持たせつつも、利下げ効果の浸透等を理由に金利を据え置いたが、12月には追加利下げを実施した。2026年2月に実施されたMPCにおいては、国内のマクロ経済状況及び見通しを包括的に検討し、現行の政策金利は適切であるとの見解が示されている。

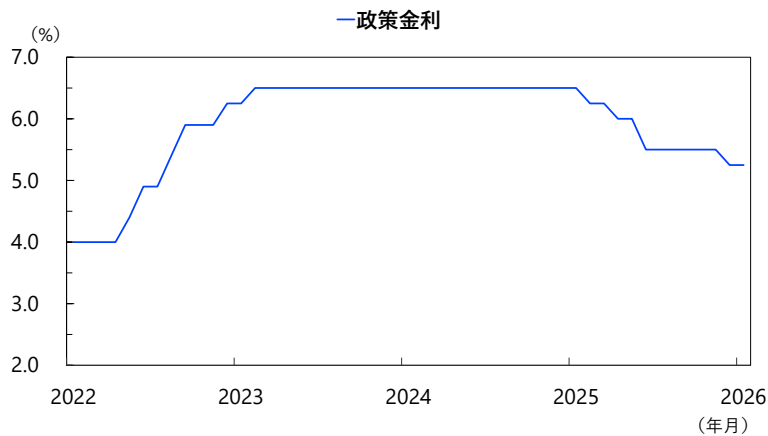
第2-1-5-12 図 インドの消費者物価指数の推移



備考：コア指数は食品・飲料、燃料・光熱を除く。インド統計・計画実施省は、2026年1月の発表から基準年を2012年から2024年に改定しており、2024年を基準年とする消費者物価指数のうちコア指数については、2026年1月以前のもは発表されていない。

資料：インド統計・計画実施省、CEIC database から作成。

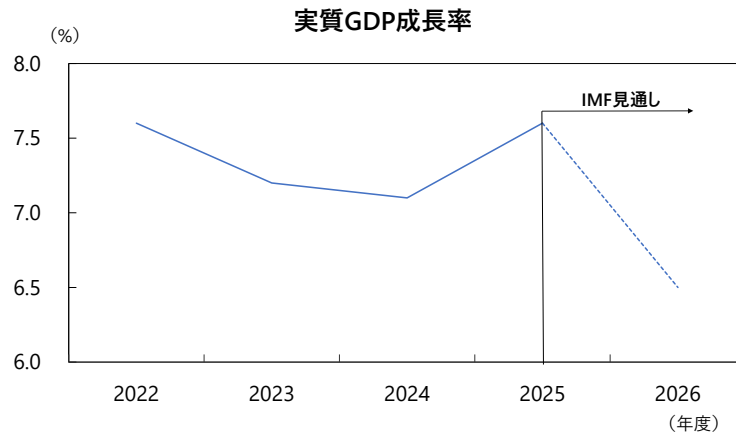
第2-1-5-13 図 インドの政策金利推移



の高止まりに加え、中東地域における緊張の高まりによる供給ショックが2026年度のインド経済に下押し圧力をもたらす可能性がある」と指摘している¹²⁴。

なお、2026年4月に発表されたIMFによる世界経済見通しによると、インドの2026年度の実質GDP成長率は+6.5%と見込まれ、2026年1月時点の見通しから0.1%上方修正された（第2-1-5-14図）。IMFは上方修正の背景として、2025年度の好調な実績の持ち越しと、米国のインドに対する追加関税が引き下げられたことによるプラスの影響によるものだと説明している¹²⁵。

第2-1-5-14図 インドの実質GDP成長率の見通し



備考：データは年度表記。

資料：IMF「WEO」（2026年4月）から作成。

¹²⁴ インド準備銀行, *Monetary Policy Statement, 2026-27 Resolution of the Monetary Policy Committee April 6 to 8, 2026*, https://rbi.org.in/Scripts/BS_PressReleaseDisplay.aspx?prid=62514 (Accessed 2 April 2026).

¹²⁵ IMF, *WORLD ECONOMIC OUTLOOK, 2026/04/01*, <https://www.imf.org/-/media/files/publications/weo/2026/april/english/text.pdf> (Accessed 2 April 2026).